

～あなたは誰に似ているのか～

私たちがだまし絵を見たとき、自分の意思とは関係なく脳が勝手に判断して絵が入れ替わります。またサルの赤ちゃんが、人が舌を出したのを見て、舌を出したりします。このことを「ミラーニューロン」といい、誰かの行動をまねして自らの人格を作り上げていくことなのです。これは生まれつきにあるものではなく、育つ過程の中でそうなります。しかし最近の研究では、全てが経験に基づいているのではなく、突然「ひらめく」ということもあるといわれています。例えば、点が動くのを見ただけでキャッチボールだとわかる、隣の人をみて男性・女性と判断できる・・・これを「バイオロジカルモーション」と言います。大人になった後、私たちは今まで真似をしていたものを捨て、自らの生き方を見つけたでしょうか。それは両親や周りから影響を受けたもので良かったもの、悪かったものをちゃんと理解し、整理できているでしょうか。努力したって変わることはできません。師を越えることが出来た人はいろんなことでそのミラーを壊したからです。例えば私たちが誰かを嫌いと言うのも『あの人ってこうよね』といった他人の言葉を聞いて、「その人は嫌な人だ。」と定義づけています。これは私たちの脳がつくりあげた防衛の記憶なのです。ミラーニューロンが勝手に作りあげてバイオロジカルモーションが完成している、つまり、となりの人がやっていることを定義付けているのです。それを繰り返していると知らないのに全てを知っているように思っています。伊勢えびの幼生を見たとき、私たちはその一部を見て「伊勢えび」だと判断します。このように私たちは一部を見て（聞いて）定義づけてしまいますが、これを続けていると「わかっているつもり」になってしまうのです。それでは人まねの人生になりそれを越えることができません。伊勢えびは何万個もの卵の中から10匹くらいが残って親になります。誰の力も借りずに自らの育った場所を離れて、自分で場所を見つけて大人になっていく、だから残って強くて子孫を繁栄できるのです。これが自然の営みです。しかし人は過保護に育てれば育てるほど、自らで物事を考えず、育てた人のミラーのようになっていきます。聖書では私たちは自らが存在する理由や価値を見つけて、それを引き伸ばすようにするように言われています。私たちは25歳までに脳で様々な事柄を定義づけると言われています。しかしイエスと出会って新しい人生を歩みだしていくには今までに築きあげられたミラーをリセットしなければ、「私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。（エペソ 4 : 13）」とあるようにキリストの身丈にまで成長することができません。「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。（1ヨハネ 3 : 2）」キリストが来た時点で、分かっている人ならばちゃんとキリストに似た者になるはずであるといっています。キリストに似た者とはどのような人のでしょうか。神が創造した時、私にまかせられたあなたの姿になることをいっています。それは人真似や人の価値観でもありません。自分がどのようにしていくのが分かったので、似るべき姿へ自らが変わっていく事をさせています。今の姿はキリストに似ていないかもしれませんが、あきらめずに変化し続けていくならば、生涯を終えた時に生き様としてキリストの姿を残していけるのではないのでしょうか。自分の役割を果たす事がそれぞれキリストの身丈に達することになります。私たちはキリストに似るために**①あなたの類似を捨てましょう**。あなたはあなたであるべきです。人を目標にすべきではありません。それはその人を越えることができないからです。あなた自身があなたの役割をしっかりと見つけてどう生きるかを決めない限りはそれができません。自らが何のために存在しているのか知っていないといけません。それを考えて初めて身丈に達することができるのです。類似を捨ててください。「似ているね」ではダメです。人まねではどれだけ素晴らしい生き方をしても人まねです。だから人から得ても意味がありません。人格であるものを見つけるために捨ててください。キリストに似るために**②他者から得た概念を処理する**。概念を捨てるのではなく、処理をして土台とします。パウロはキリストに出会う前にパリサイ人として律法にも正しく生きてきました。回心後、それらは“塵あくた”と呼んでいます。パウロが残した手紙にはそれまでに習得した律法が土台になっています。このように私たちは今まで得てきたものを自分の知識として持つのではなく土台とできていますか。私たちは今、どうしてこのように生きているのか、考えているのかなど概念化されているのでしょうか。聖書のどの部分が自分の生きる概念になっているのでしょうか。すなわちイエスキリストのどの姿が私たちの生き方の根底になっているのかを知らなければなりません。自らだけのために得たのではなく、周りにいる人と共に建てられるために聖書を土台にして歩んでいます。「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ 4 : 16）」世の中は競争している相手を蹴落とし自分自身の事だけしか考えませんが、聖書は競争しているものが共に切磋琢磨しながら1つの体としてそれぞれが役割を果たしながらゴールできるようにと書かれています。メルキゼデクという祭司が旧約聖書には出てきます。彼は「父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。（ヘブル 7 : 3）」と書かれています。彼は父や母の概念で祭司となったのではなく、神の前で自分の役割を果たしていました。私たちも誰かの人真似ではない生き方をしていきましょう。そのために聖書から学ぶ必要があります。しかし注意したいのは人物を真似るのではなく、神が語った言葉を真似していきましょう。**③偽らず神に習うものになりましょう**。（コロ 3 : 9~10）偽りとは自分のものでないのに自分のものであるということであったり、自分があたかも価値観を持っているように振舞うことも偽りです。最初は良くても、プロセスが悪ければ、古いままで終わってしまう人生になってしまいます。偽りを見抜くために私自身が何のために生きているのかを神にあって知らないといけません。変わるためには私たちの根底を変えないといけません。自らがこう生きて行くというものを築き上げなければいけません。そしてその生き方に責任が取れるようにしなければいけません。人からの指摘されて直していくのではなく、自らがどうあるべきかを神の前で見つめ直しましょう。それによって神に作られた理由が分かります。私たちがどのような生涯となっていくのか。ゴールに焦点を合わせ、日々のプロセスを大事にしていきましょう。それも人真似や人から入ってくる情報のような偽りで判断することなく、神から得た自らの役割をしっかりと果し、素晴らしい人生と言われるようにしていきましょう。（要約者：平澤一浩）